

156 権威についての問答、「二人の息子」のたとえ

マタイによる福音書 21 : 23~32、マルコ 11 : 27~33、ルカ 20 : 1~8

..... 前回 (ファイル No.155) に続き、ニサン月の 12 日 (火曜日) の出来事である.....

▶権威についての問答 (マタイによる福音書 21 : 23~27、マルコ 11 : 27~33、ルカ 20 : 1~8)

23 イエスが神殿の境内に入って教えておられると、(ユダヤ人の政治と宗教の指導者である) 祭司長や民の長老たちが近寄って来て言った。

「何の権威でこのようなことをしているのか。だれがその権威を与えたのか。」

→祭司長 (サドカイ派、親ローマ) や民の長老 (ファリサイ派) たちは、今日の神殿で教えていることを含め、過去のこと (勝利の入城、人々の賞賛、宮清め他) も念頭に置き、イエスに質問をしている。

また、彼らがイエスに対してこのような質問をするのは別におかしいことではない。

なぜなら、①彼らは自分たちのことを真理の守護者だと自負 (自認) し、

②イエスの権威に挑むのは自分たちの立場を守るうえで当然である、

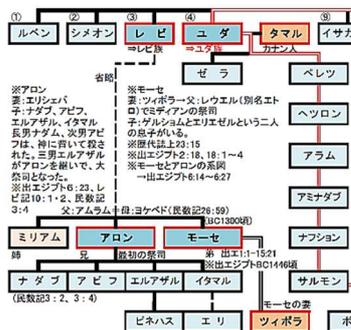
そして、③イエスはユダヤにおけるラビとしての教育を受けていないという理由からである。

→祭司は、レビ族の子孫で、①祭司 (ユダヤ教で香油を塗られて聖化された祭司) と②祭司長 (大祭司) に分かれる。大祭司は、バビロン捕囚後の時期 (BC538 頃~) に出現した制度である。大祭司は最初の大祭司アロンの家系の者で、その最年長者が世襲で継承した。大祭司の職務は通常の祭司職の他、年に一度の大贖罪日 (贖いの日) に至聖所に入り、神の前に

民を代表して、自己の罪とイスラエルの罪の償いのためにいけにえのやぎの血を贖いのふたにかけ、全イスラエルの罪の贖いをした。祭司長は長老たち、律法学者たちと並んでサンヘドリンを構成し、それを主導した。

→レビ記 16 : 34

これはあなたたちの不変の定めである。年に一度、イスラエルの人々のためにそのすべての罪の贖いの儀式を行うためである。モーセは主のお命じになったとおりに行った。



太陽暦・ユダヤ暦・バビロニア暦

太陽暦	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
月 (ヘブライ暦)	第一の月	第二の月	第三の月	第四の月	第五の月	第六の月	第七の月	第八の月	第九の月	第十の月	第十一の月	第十二の月	
ユダヤ暦	ニサン Nisan, Nissan	イヤール Iyyar	シバン Sivan, Sivan	タムーズ Tammuz	アブ Abh, Av	エルール Elul	ティシュリ Tishri	マルヘ シバ Marchesvan	キスレーヴ Kislev, Kislev	テベツ T'ebheth	シュバツ Sabbat	アダ Adhar, Adar	
バビロニアの月名 0: カナンの古称	ニサン (アビフ)	イヤール (ジウ)	シワン	タンムズ	アブ	エルル	ティシュリ (エタニム)	ヘシュワン (フル)	キスレウ	テベツ	シェバツ	アダ	
主な行事	七週間		七週祭 (シャブオット) 新月 II 五旬祭 (ペンテコステ Pentecoste ギリシア語)				I: 新年 10: 大贖罪日 15~21: 仮庵祭 (スコット) 満月		25: 宮清めの祭 (ハスカの祭り) (25日~8日間)				
	14~21 過越祭 (ベサハ) 満月 除酵祭		※ユダヤの三大祭: 過越祭、七週祭、仮庵祭				①イエス・キリストが過越祭の時に、子羊として十字架にかけられ、殺された。 ②三日目によみがえられた。一復活祭						

至聖所には契約の石が入った祭壇があり、民全体のための罪の贖いをするために入ることが許されました。このことによって、民たちの罪は赦され、神との交わりが可能となりました。この幕屋がやがてソロモン時代には神殿となって規模もはるかに大きくなりましたが、毎年の大贖罪日のときには、動物の血が川のように神殿から流れたようです。血を流すことなしに神との交わりはあり得ませんでした。今は、イエス・キリストが完全な一回限りのいけにえの血潮をささげてくださったことにより、私たちはキリストによって、大胆に神の前に近づくことができます。そうした礼拝制度、神との交わりのために仕えていた祭司たちのトップが大祭司でした。(出典: 牧師の書齋)

※ユダヤのラビたちは、過去のラビたちの教え、発言を引用するのに対し、イエスの引用は旧約聖書のみである。

【参考】 サドカイ派とファリサイ派

▶ 富裕層の支持が多いサドカイ派 →ヘレニズム（＝ギリシア風）文化に対して柔軟
中間時代に誕生したサドカイ派は、その名を祭司の主流派、ツアドク（ザドク）に由来し（サムエル記下 20：25、列王記上 1：38～44）、神殿詣（神殿信仰）に重点を置き、そこで犠牲を献げることがを教えた。裕福な上流社会のユダヤ人（サムエル記下 20：25、列王記上 1：39～45）＝祭司、教養のある金持ち、貴族階級に属する人々でファリサイ派と対立した。彼らは、モーセ五書（トーラー）のみをファリサイ派のように多くのこじつけ議論等に陥ることなく非常にまじめに解釈した。ファリサイ派との違いは、サドカイ派は神が人々を死後によみがえらせることが律法に記されていないことから、天使、悪霊、魂の永遠性、死後の世界や復活を信じず、終末論の死後の世界に対する信仰もなかった。サドカイ派はファリサイ派と異なり、政治的には既得権益を守るために親ローマであったため、一般大衆の支持がなかったが、宗教と政治の面では力（神殿礼拝、神殿ビジネスの完全支配）があり、非常に影響力があった。

▶ 貧困者に支持者の多いファリサイ派 →ヘレニズム（＝ギリシア風）文化に対して否定的
ユダヤ教の教派で、イエスの時代に最も高く評価されていたのは、中間時代に誕生したファリサイ派で、この時代、民衆にとっては、ユダヤ教＝ファリサイ派的ユダヤ教であった。
ファリサイ派はハスモン朝^{※1}時代に形成され、天使、悪霊、魂の永遠性、死後の世界を信じ、律法遵守を徹底し、特に安息日や断食（週2回、木曜日と金曜日）、施しを行うことや清めの儀式を強調した。律法学者（モーセ五書〈トーラー〉＝創世記、出エジプト記、レビ記、民数記、申命記＝を研究する学者）の多くがファリサイ派に属し、聖書（旧約）の独自の研究と伝承による解釈を固執、主張した。聖職者である律法学者（ラビ rabbi）を信仰の仲介者とし、ユダヤ人会堂の多くを管理していた。ファリサイ派は、律法を研究、遵守して、どのように生きるべきかについて教えていたために、民衆に尊敬されていた。ファリサイ派の名称は、「パルーシム（パルシム）」＝「分離する者」あるいは「清い者」を意味するヘブライ語に由来するとされるが、正確には不明である。
ユダヤ人指導者の中には密かにイエスを信じる者もいたが、ユダヤ人会堂から追放されるのを恐れ、このことを公言しなかったし、もし、それが発覚した場合は、ユダヤ人指導者たちは、イエスを信じるようになった者をユダヤ人共同体や会堂から追放した（ヨハネによる福音書 9：22）。
イエスを訪問したニコデモは最高法院に属する議員で、ファリサイ派の教師でもあった（ヨハネによる福音書 3：1）。

また、ファリサイ派の人々はイエスが自分たちの立場や影響力を脅かすと考え、イエスを殺そうと企んだ（マタイによる福音書 26：1～5、マルコによる福音書 14：1～2、ルカによる福音書 22：1～6、ヨハネによる福音書 11：45～57）。

エルサレム神殿の崩壊（AD70年）後はユダヤ教の主流派（神殿に拠っていたサドカイ派は消滅）となり、会堂に集まって聖書を読み、祈りを捧げるスタイルが、ユダヤ教のスタイルとなっていった。

※1：BC 140年頃からBC 37年までユダヤの独立を維持して統治したユダヤ人王朝。BC 166年に起きたユダ・マカバイによるセレウコス朝軍への決起から約20年後に成立。フラウィウス・ヨセフスによればハスモンという名は一族の先祖、祭司マタティアの祖父の名前に由来しているといわれている。フラウィウス・ヨセフスは、帝政ローマ期の政治家及び著述家である。AD66年に勃発したユダヤ戦争でユダヤ軍の指揮官として戦ったがローマ軍に投降し、ティトゥスの幕僚としてエルサレム陥落にいたる一部始終を目撃、後にこの顛末を記した「ユダヤ戦記」や「ユダヤ古代誌」を著した。
ヨセフスは、青年時代にサドカイ派やエッセネ派などを経て、最終的にファリサイ派を選んでいる。

24 イエスはお答えになった。

「では、わたしも一つ尋ねる。それに答えるなら、わたしも、何の権威でこのようなことをするのか、あなたたちに言おう。」

→ラビ的議論の応酬話法：①質問に対してイエスも質問で応答し、②質問に対して答えるなら、同様に、イエスも質問に対して答える方法である。

25（洗礼者）ヨハネの^{バプティスマ}洗礼（→単に、洗礼のみではなく、すべてのヨハネの奉仕活動）はどこから（つまり何の権威によって）のものだったか。（それは）天からのものか、それとも、人からのものか。」

(このイエスの問いかけに対して) 彼らは論じ合った。

『天からのものだ』と言えば、『では、なぜ(洗礼者)ヨハネを信じなかったのか』と(イエスは)我々に言うだろう。26(逆に)『人からのものだ』と言えば、群衆(が騒ぎ出すの)が怖い。(イスラエルの民の)皆が(洗礼者)ヨハネを預言者と思っているから。」

→祭司長たちは、ローマの目を恐れていたのだから、「世論」を過剰に気にした。ヨハネは、イエスのことを指して「神の小羊だ」と叫んでいた。

→ヨハネによる福音書 1:36

そして、歩いておられるイエスを見つめて、「見よ、神の小羊だ」と(洗礼者ヨハネは)言った。

27そこで、(苦肉の策として) 彼らはイエスに、「分からない」と答えた。

すると、イエスも言われた。

「それなら、何の権威でこのようなことをするのか、わたしも言うまい(→わたしもあなたがたの質問には答えない)。(本当のことは、あなたたちも分かっているだろう。)」

→ラビ的議論の応酬話法

▶「二人の息子」のたとえ(マタイによる福音書 21:28~32)

28「ところで、あなたたちはどう思うか。ある人に息子が二人いたが、彼は兄のところへ行き、『子よ、今日、ぶどう園へ行って働きなさい』と言った。29 兄は『(お父さん、) いやです』と答えたが、後で考え直して(→悔いて) 出かけた。

30 弟のところへも行って、同じことを言うと、弟は(すぐに)『お父さん、承知しました』と答えたが、出かけなかった。

31 この二人のうち、どちらが父親の望みどおりにしたか。」

彼らが「兄の方です」と言うと、イエスは言われた。

「はっきり言っておく。(救い難い) 徴税人や娼婦たちの方が、あなたたちより先に神の国に入るだろう。→イエスはユダヤ人指導者を兄に、徴税人や娼婦たちを弟にたとえられました。しかしここで、イエスは彼らを逆の順序でたとえられました。これは、ユダヤ人(イスラエル)が神の長子であり(出エジプト 4:22)、長子の権利を持っていたものの、彼らの不信仰のゆえに長子の権利は集会(天使やキリスト者たち)に移り、集会が神の長子となったことを示します(ヘブライ 12:23)。

→参考:新改訳聖書は、他の聖書と写本(底本)が異なり、内容が逆になっている。

28 ところで、あなたがたは、どう思いますか。ある人にふたりの息子がいた。その人は兄のところに来て『きょう、ぶどう園に行き行って働いてくれ』と言った。29 兄は答えて『行きます。お父さん』と言ったが、行かなかった。30 それから、弟のところに来て、同じように言った。ところが、弟は答えて『行きたくありません』と言ったが、あとから悪かったと思って出かけて行った。

31 ふたりのうちどちらが、父の願ったとおりにしたのでしょうか。」彼らは言った。「あとの者です。」イエスは彼らに言われた。「まことに、あなたがたに告げます。取税人や遊女たちのほうが、あなたがたより先に神の国に入っているのです。」

32 なぜなら、(洗礼者)ヨハネが来て(信仰の)義の道を示したのに、あなたたちは彼を信ぜず、徴税人や娼婦たちは(ヨハネを)信じたからだ。あなたたちはそれを見ても、後で考え直して彼を信じようとしなかった。」

→ローマ帝国は、徴税の権利書を発行した。この権利書は一般に裕福な異邦人に与えられ、徴税人(元締め)に雇われた地元の人が税を徴収した。ユダヤ人は徴税人を宗教的に汚れている(→罪人、売国奴等)と考え、裏切り者と見なした。